

よそ者と地域住民がつくる「子どもの居場所」

-北海道石狩市厚田区における「みんなの居場所 あつみん」の開設と運営-

A Children's Place Created by Outsiders and Locals

-Establishment and Management of "Everyone's Place Atsumin" in Atsuta Ward, Ishikari City, Hokkaido-

堀田 ゆりあ 小林 重人

Horita Yuria Kobayashi Shigeto

札幌市立大学大学院デザイン研究科

Abstract : This study explores the impact of collaboration between outsiders and locals in creating a children's place in Atsuta ward, Ishikari city, Hokkaido, where play opportunities are limited due to depopulation and geographical challenges. "Atsumin" was established to foster children's creativity through

Key Word : Outsiders' Roles, Local Place Design, Creative Activity

interactive activities, with workshops by outsiders introducing new knowledge and skills. We found that outsiders' roles varied based on their involvement with the community, which was visualized in a diagram. Active parental participation ultimately drew support from the broader local community.

1. 研究背景

1-1. 放課後に遊べない過疎地域の子どもたち

全国の過疎地域では少子化によって小中学校の統合、通学区域の拡大が進み、通学にスクールバスを導入する学校が増加した。その結果、該当地域の子どもはスクールバスの運行時間に伴い、放課後に遊ぶ時間と機会が制限されている。本研究の対象地、北海道石狩市厚田区も同様の問題を抱える地域である。

石狩市厚田区は、2005年に厚田村が石狩市に編入合併して誕生した地域自治区であり、2025年現在の厚田区の人口は1,534人、15歳未満の人口は74人である。厚田区は全長29kmと南北に長い地形に住宅が点在するため、子どもが自力で友人宅に行くことは難しい。区内唯一の学校「厚田学園」は部活動が2つしかなく、土日に保護者の送迎で他地域のクラブ活動に参加する生徒もいる。

2023年に筆者が厚田区集落支援員の八木沼幸恵氏と実施した厚田区の子育て世代を対象としたインタビュー調査(未就学児から高校生の子どもを育てる37世帯中、31世帯の回答)でも厚田区の子どもは遊ぶ場所が少なく、テレビゲームを用いた1人の室内遊びが多いことなどが判明している[1]。

石狩市役所子育て推進部や市内複数の児童館を対象としたインタビュー調査では、厚田区の子どもの大半が「地理的に遠い、交通手段がない」という理由だけで行政の子育て支援や児童館の活動を十分に享受できていないことが明らかになった。

これらの事実より、八木沼氏は「区内に子どもの居場所をつくりたい」と考えるに至ったが、地域の人材や資金不足から容易に実現できなかった。そこに厚田区出身ではない「よそ者」として筆者が子どもの居場所づくりに関与することで、地域の限られた人材だけでは解決が難しい課題によそ者がどのように貢献できるのかを明らかにしようと試みた。

1-2. よそ者による地域活動の効果と影響

よそ者が関与する地域活動は、すでに多くの地域で行われており、よそ者が地域住民と協働するための方法や活動後に地域で生じる影響についても研究が行われている。その中でも敷田[2]はよそ者が地域に与えるとされる効果を「①技術や知識の地域への移入、②地域のもつ創造性の惹起と励起、③地域のもつ知識の表出支援、④地域や組織の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決」と示した。一方で大野・坂倉[3]は地域活動に参入するよそ者だけではなく、彼らを受け入れる地域住民の変容過程を示すことで、よそ者と地域住民の協働関係がどのように構築されるのかがより明らかになるとしている。

ただ、敷田は5つのよそ者効果は独立した事象ではなく、複合的に同時に起こるものとしつつ、各効果が地域活動のどの場面で生じるかは明らかではない。そして、どのようなよそ者がどの効果を出現させられるかについては言及していない。また、大野らが示した地域住民の変容過程は「地域のリーダー層」に限られており、それ以外の地域層の変容までは示すことができていない。

2. 研究目的・方法

本研究では、地域の出身、居住者ではない人間(よそ者)が人材や資金の乏しい地域とどのように協働することで、よそ者効果を発揮した「子どもの居場所」をつくることができるかを明らかにする。この目的を達成するため、①子どもの居場所づくりの過程でよそ者効果が生じる場面を示す、②よそ者効果が生じなかった場合、その原因と解決策を考察する、③対象を「居場所運営に関わる地域住民、組織」として、子どもの居場所づくりで生じた地域の変容過程を記録する。これらの方法によって、よそ者効果の立証と改善案の提示、地域における新たな層の変容過程の解明を進める。

3. 子どもの居場所の開設と運営

前述した調査より「厚田区内には遊び場が少なく、子どもは受け身な遊びをすることが多い」という状況から、本研究では子どもが活動において「自分がやってみたくいこと、ほしいもの」を自ら創り出す力(創造力)を高める居場所をつくることを筆者は提案し、居場所の空間と活動内容の計画を八木沼氏と行った。

居場所は石狩市役所の厚田支所に設置し、運営は区内の保護者3名が加わり、八木沼氏と筆者の計5人で、2024年7月～2025年3月に計14回の活動を実施した。2回目の実施では居場所を利用する子どもに対して「居場所の名称」を募集し、投票の結果「みんなの居場所 あつみん」に決定した(以降は、あつみんと省略する)。

あつみんでは、運営者から子どもに遊ぶ玩具を提供せず、工作道具や材料を用意した「創作活動の場」を設置した。また厚田区外の人材を講師として、子どもの創造力の向上につながる「特別講座」を開催した。

4. 考察

4-1. あつみんで見られるよそ者効果

あつみんの活動や運営を通して、子どもや運営者、地域住民に確認された変化をよそ者効果に照らし合わせて以下に示す。

まず、子どもの主体性を尊重した場づくりと声かけを運営者が行ったことで、子どもは玩具がなくても簡易な材料で遊び道具を

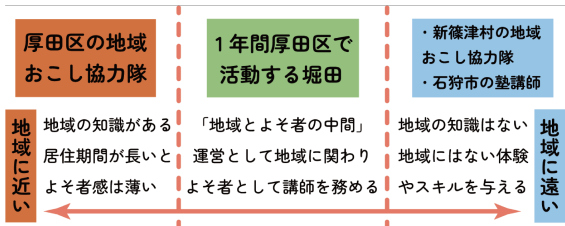


図1 子どもの居場所におけるよそ者の段階

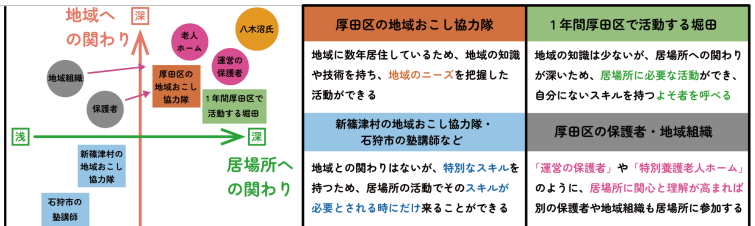


図2 よそ者と地域住民の「地域と居場所」への関わり度合い

作ったり、オリジナルの遊びを考えたりするなど、子どもの創造力が高まる様子を確認した（よそ者効果②に該当）。そして、あつみんの開催ごとに、活動に関心を高めた行政や地域組織の職員が見学を訪れるようになり、子どもと話したり、共に遊んだりするなど、これまで面識のなかった大人と子どもの交流が生じた。また、あつみんでの交流を通して「共通の遊びが好きである」と認識した子どもたちが互いの自宅で遊ぶなど、子どもの交流拡大も確認できた（よそ者効果④）。

子どもの創造力向上を目指した特別講座では、筆者と他地域の講師（新篠津村の地域おこし協力隊、石狩市内の塾講師など）で、厚田区民だけでは提供できない新しい知識や技術（マシュマロチャレンジ・天体観測・プログラミングなど）を子どもに提供できた（よそ者効果①）。一方で、厚田区民だけが知る地域の知識や伝統技術を用いた講座は、厚田区において「活動期間が短い」よそ者（筆者）だけでは企画できなかった（よそ者効果③）。

居場所の運営では当初、八木沼氏が1人で担っていた広報チラシの作成を筆者が引き受けたり、運営者と保護者であつみんの開催日や活動内容、参加予定者などの情報共有ができるオープンチャットを作成、運用したりしたことで、運営の役割分担と効率化を図った（よそ者効果⑤）。

4-2. よそ者の段階/役割が異なるよそ者

前述した通り、あつみんの特別講座は、よそ者が自らのスキルを用いて新しい知識や技術を伝えられても、厚田区の知識や技術を表出する支援はできなかった。一方で、移住を目的とし、3年間厚田区民と活動する地域おこし協力隊隊員が区内の動植物に精通し、その知識を活かした地域イベントを以前に実施していたことから、よそ者は「地域における活動期間や関心度の違い」で地域との心理的距離が異なり、筆者や他地域のよそ者、区内の地域おこし協力隊では「よそ者の段階」が生じていると考察した。したがって、よそ者は共に活動するよそ者と自らを比較し、自分が「どの段階にいるよそ者なのか」を理解することで、自身が持つスキルを適切に子どもの居場所へ活かすことができると考えた（図1）。例えば、地域と距離が近いよそ者は地域の事情を踏まえ、厚田区の知識や技術を用いた活動ができ、地域と距離が遠いよそ者は地域としがらみが少なく、新しい知識や技術をもたらす活動が期待できる。

また、図1に「居場所（あつみん）への関わり度合い」を加えることで、あつみんに関わるよそ者をより詳細に段階分けした（図2）。地域活動においてよそ者は地域に馴染みすぎず、よそ者視点を保つことは重要である。しかし、これらの段階図を活用すれば、居場所への関わりが深い筆者は、地域への関わりも深めることで地域内外の様々なよそ者を居場所に誘致しやすくなったり、講師として参加した区外のよそ者が居場所への関わりを深めることで運営の一員になったりと、よそ者が「自分のなりたいよそ者」に変容することも期待できる。

5. 居場所の活動が地域に与えた影響

あつみんの活動前後、地域の変容過程を記録するために、運営に関わる保護者・行政・地域組織にインタビュー調査を実施した。運営を担った保護者は、これまでの自身の経験（子ども会会長、災害復興ボランティア）を運営で発揮し、長期的実施に向けて話し合う場を希望するなど、主体的な運営姿勢を示すようになった。そして、運営者の姿は行政や地域にも良い影響を与え始めている。石狩市は、地域住民が子どもの課題を解決しようとあつみんをつくり、運営する姿から厚田の子育て事情を再認識した。また、あつみんの開催形態を変えた実施、子どもの意見を取り入れた運営などを提案する姿勢から居場所運営にも強い関心を示しており、あつみんの長期的運営を支援するために、2026年以降の予算措置を検討している。

あつみん開催当初から見学に訪れていた区内の特別養護老人ホームは、保護者があつみんを運営する様子を見て、地域組織として「地域に貢献したい気持ち」を高め、運営に協力する動きが見られた（開催場所の貸出や備品・食材の提供など）。

6. 結論・展開

厚田区の子どもは、遊ぶ場所や機会が限られ、行政の子育て支援サービスも十分に利用できないという課題を抱えていた。この状況を改善するため、筆者は地域住民と共に子どもの居場所を開設した。子どもの創造力を高める場づくりやよそ者による特別講座の実施は、よそ者効果の該当箇所を踏まえ、子どもの創造力と交友関係に良い影響が見られた。

また、よそ者効果が見られなかった特別講座の内容や他のよそ者と筆者自身を比較する過程で「よそ者の段階とそれぞれのよそ者が持つ役割」に気づき、その考察結果を図式化した。示した図は今後のあつみんや他の地域活動にも役立つことが期待される。

よそ者を受け入れた地域住民の変容としては、運営の保護者が主体的に活動する様子を目にし、行政や地域組織も子どもの状況や居場所に対する関心を高め、現在は地域全体で子どもの居場所をつくる体制ができたと言える。

本研究で示したよそ者効果やよそ者の段階、地域住民の変容をより分かりやすく示すことができれば、よそ者は地域に入りやすく、地域はよそ者を受け入れやすくなり「子どもの居場所」に必要な人材は増え、活動も迅速かつ継続的にできると考える。

参考文献

[1] 石狩市厚田支所, 八木沼幸恵, 堀田ゆりあ, 2024, あつクラ子どもアンケート結果, <https://www.city.ishikari.hokkaido.jp/uploaded/attachment/51052.pdf> (2025/3/17参照)

[2] 敷田麻実, 2009, よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究, 国際広報メディア・観光学ジャーナル, 第9巻, pp. 79-100.

[3] 大野佳祐, 坂倉杏介, 2024, 地域活性化における移住者と地元出身者の相互変容に関する研究-島根県海士町を事例に-, 地域活性研究, 第21巻, pp. 21-30.